

総括コメント：外国語教育の連携・協力の常識を超えていく

臼山利信

山崎吉朗理事長から「JACTFL 発足から4年目を迎えて、いよいよ国の教育行政に関わる中枢部分に声をあげる、提言を出すという活動をしてきた。またさらに力を入れていきたい」との発言がありました。4年前は日本の外国語教育政策のステークホルダーに提言などを通して働きかけをすることがどの程度の効力を持つのか、また JACTFL のそうした活動が教育現場に少しでも肯定的な影響を与えることができるのかという不安もありました。しかし、4年が経過し、山崎理事長のリーダーシップの下、それが着実に結実しつつあることを実感します。

上智大学の藤村正之副学長(学務担当)は、同大学の外国語教育の柱として「3言語3視座」という理念を打ち出していることを述べられました。すなわち、日本語・英語・現地語という3言語、日本という空間・グローバル社会・現地のローカルな空間という3視座が外国語教育の中で大切だという考え方です。まさに、グローバル人材は単なる英語力のある人材ではないということを示す最良の例だと思います。

文科省初等中等教育局国際教育課の圓入由美外国語教育推進室長は、中央教育審議会の議論において、次の学習指導要領の最大のポイントが社会とのつながりにあること、社会に開かれた教育活動という視点がクローズアップされていることを指摘されました。これは(公財)国際文化フォーラムの『外国語学習のめやす』(2012)で示された理念と強く響き合うものですが、社会とのつながりを意識した教育課程が重要である、そして教育活動全体の中でも外国語教育も社会につながっていくという視点を取り入れていくことが極めて大切になるという今後の教育改革の方向性の一つが示唆されました。

本日の基調講演をされた森住衛先生(関西外国語大学客員教授・大阪大学名誉教授)は、日本の複数外国語教育の歴史・現在・展望について独自の観点から縦横無尽に語られました。その中で、非常に印象深かったのは、「多様な外国語教育、言語教育の多様性というのは優しさである、すなわち、無視することではなく、見ているよ、忘れてないよ、というメッセージをしっかりと伝えていることである」とのご発言と、「外国語教育の目的は、人格形成と平和主義である」というお考えです。特に後者は、「外国語教育と言っても英語教育だけではなく、豊かな複数外国語教育こそが人生観を変える」というの信念であり、「外国語教育が人生観をよくも悪くも変える、その意味で、良い人生観を持つための外国語教育という視点が大切だ」という教育哲学だと思っています。

東京都教育庁指導部の石毛朋充国際教育事業担当課長は、東京都自身の中・長期戦略に立ったグローバル人材の育成を目指し、東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、行政側のイニシアチブで本格的に第二外国語教育を導入し始めたことを紹介されました。こうした東京都の動きには大きな意義があります。東京都が変われば、他の自治体も注目します。そして東京都が成果をあげれば、他の自治体に一定の波及効果が広がっていきます。現在の東京オリンピック・パラリンピックという追い風のチャンスを逃さないで、JACTFLをはじめ、外国語教育関係の団体が、相互に連携・協力しながら、外国語教育政策について、アイデアを持って積極的に行政サイドに働きかけていく、そして様々な形で関わっていくことが必要だと考えます。

分科会については、各ファシリテーターから詳細な報告がありました。外国語教育の多様化の実現に向けて、報告者も参加者も数多く意見をかわし、議論できたのではないかと思います。どの報告者の発表も触発力に富んだものでした。その中でいくつか感じたことを述べると、①多様な外国語教育にはそれなりのお金がかかり、予算との関わりを考えていく必要があること、そして、②予算を獲得するためには、いかにして教育の効果を測定し、教育効果の根拠を示していくかという点が重要になること、の二つです。多様な外国語教育を普及・振興する目的で公的資金を投入する場合、その教育効果があることを立証していかなければなりません。

シンポジウムのテーマは、「多様な外国語教育の価値を発見する」です。特に、外国語教育分野における小学校と大学の共同研究(小大連携)、中学校と大学の共同研究(中大連携)、高等学校と大学の共同研究(高大連携)、中学校と高等学校との共同研究(中高連携)という観点からの報告は、教育段階の違いを超えた協力関係が新しい価値の発見につながり、既存の外国語教育のあり方に新しい視点を提供できるということを示しています。その意味で、今日参加された多くの方々が外国語教育について何らかの新しい価値を発見したのではないかと、少なくとも何らかのヒントを得たのではないかと思います。

今回の報告にはありませんでしたが、外国語教育の共同研究の可能性として、幼稚園と小学校(幼小連携)、幼稚園と中学校(幼中連携)、幼稚園と高等学校(幼高連携)、幼稚園と大学(幼大連携)、小学校と中学校(小中連携)、小学校と高等学校(小高連携)などといった組み合わせもあり得ます。また公立の学校同士の組み合わせ(公公連携)、私立の学校同士の組み合わせ(私私連携)、さらに公立と私立の学校同士の組み合わせ(公私連携)もあります。今日の発表でも公立の中学校と私立の高校とのコラボによって生み出された教育効果に関する具体的な紹介もありました。このように多様な連携・協力の組み合わせが可能であり、教育段階の連携において既存の価値観や常

識にとらわれないことが大切だと改めて感じました。

JACTFL の最も大きな特徴の一つは、いろいろな言語教育の関係者、異なる教育段階の関係者など、多種多様な背景を持っている人たちが集まっていることです。しかも、垂直方向ではなく、水平方向の人の集まりであり、あくまでも横のつながりが基本です。この多様性と水平関係こそが豊かな可能性と将来性を秘めているのです。従来の常識にとらわれない新たな組み合わせによる協力関係を築きながら、外国語教育に取り組むことがこれから重要だと思います。そうすることで、新しい視点、新しい価値、新しい外国語教育のあり方がどんどん生み出されていくのではないのでしょうか。いろいろな組み合わせや関係性などの中で、相互触発という化学反応が起こり、外国語教育の新しい姿が出来上がっていくものと確信しています。

今世界は大きく変わろうとしています。産業構造が劇的に変わりつつあります。ありとあらゆるものがインターネットにつながる IoT (Internet of Things) の時代に入りました。また人工知能 (AI) が人間の社会、人間の生活に広く深く入ってこようとしています。その結果、現存の数多くの職業や職種がなくなっていくと予想されています。人間社会の劇的変化が、おそらく 10 年、20 年のうちに来ます。こうした世界の潮流から日本社会も逃れることができません。先端技術時代に対応した新たな外国語教育が早晚求められます。

JACTFL は、外国語教育の新たな価値の発見とその可能性をこれからも探求し続け、触発力のある内容を来年のシンポジウムにおいても提供していきたいと考えています。

(筑波大学)